

ハウス秋冬出荷シンテッポウユリにおける良苗生産のための灌水法

1 情報・成果の内容

(1) 背景・目的

近年、シンテッポウユリの秋冬作型において、種子の発芽勢の低下やその後の生育が緩慢なことで、適期苗（2～2.5葉）になるまでに日数がかかり、抽台率を向上させるために行う苗冷蔵が出来ない、定植が遅れるなど、苗品質の低下が問題となっている。これは種子品質の問題だけでなく、育苗期間中の管理にも課題があると考えられる。その中で灌水による影響は大きく、良苗生産には適した灌水管理が必須である。そこで、苗冷蔵に対応できる苗を短期間で養成できる灌水方法について検討した。

(2) 情報・成果の要約

乾燥気味（育苗トレイ重 2.0～2.5kg）に灌水管理を行うと、慣行（育苗トレイ重 2.5～3.0kg）および過湿気味（育苗トレイ重 3.0～3.5kg）の灌水管理と比べて苗の生育が遅れる。用土表面を乾かさないう灌水管理が苗の生育に良い。

2 試験成果の概要

- (1) 2022年4月19日にチェーンポットに播種し、5℃暗黒下の冷蔵庫で2週間の種子冷蔵後、出庫してハウスで育苗した。本葉が展開し始めた5月23日から定植期である6月29日まで表1の処理を行った。
- (2) 育苗トレイの総重量および用土重は、いずれの処理区も同等だった（表2）。
- (3) 処理期間中の育苗トレイ総重量の推移は、5月23日から6月2日は処理の基準範囲外となることがあったが、6月2日以降はほとんど処理の基準範囲内で推移した（図1）。
- (4) 灌水量は処理期間を通じて過湿気味区が最も多く、ついで慣行区、乾燥気味区の順だったが、その差は30～40mm程度だった（図2）。
- (5) 定植時の苗品質は、過湿気味区の葉枚数および最大葉長、乾物重の値が他区と比べて高く、生育が進んでいた。次いで、慣行区の生育が進んでおり、葉枚数が過湿気味区と同等の3.1枚で、最大葉長と乾物重の値が過湿気味区に次いで高かった。乾燥気味区の生育が最も遅れており、葉枚数、最大葉長、乾物重のいずれの値も他区と比べて低かった（表3）。
- (6) 乾燥気味区は育苗トレイ重が2.2kg以下になると用土の表面が乾き始めたが、慣行区と過湿気味区は用土表面が乾くことはなかった。

表 1 処理区

処理区	育苗トレイ重	灌水量目安
慣行	2.5～3.0kg	
乾燥気味	2.0～2.5kg	400ml
過湿気味	3.0～3.5kg	

注) 朝と昼に重さを測り、育苗トレイ重が基準範囲の上限値になるよう灌水する。

例) 慣行区の育苗トレイ重 2.6kg のとき、3.0kg になるように灌水する。

表 2 用土乾燥時の育苗トレイ総重量と用土重

処理区	総重量(g)	用土重(g)
慣行	1729	1080
乾燥気味	1774	1119
過湿気味	1729	1091

注 1) 総重量は水稻育苗トレイ、チェーンポット、ネットマール、用土の重量の総和

注 2) n=2

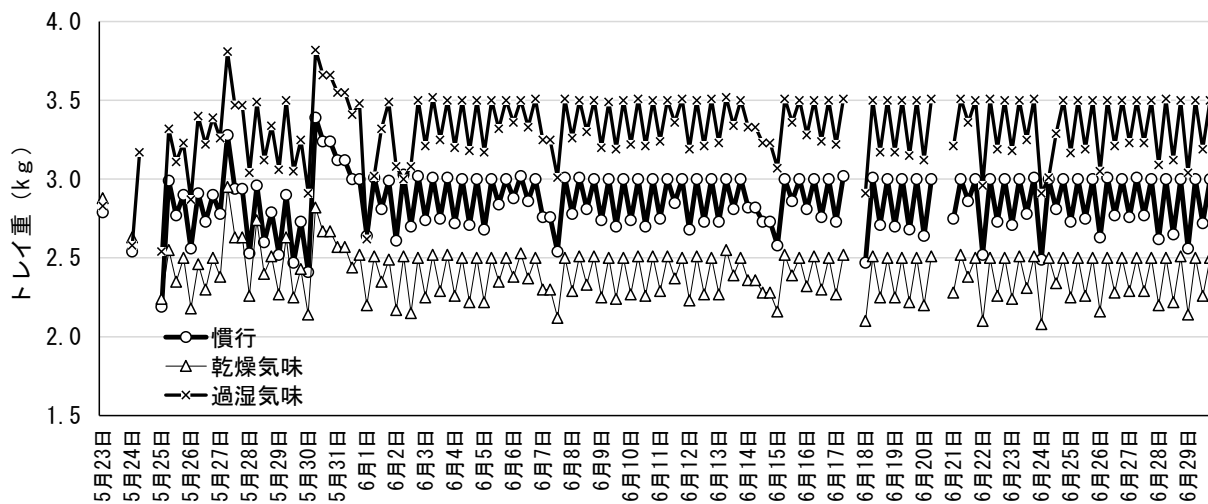


図 1 処理期間中の育苗トレイ総重量の推移

注) n=2

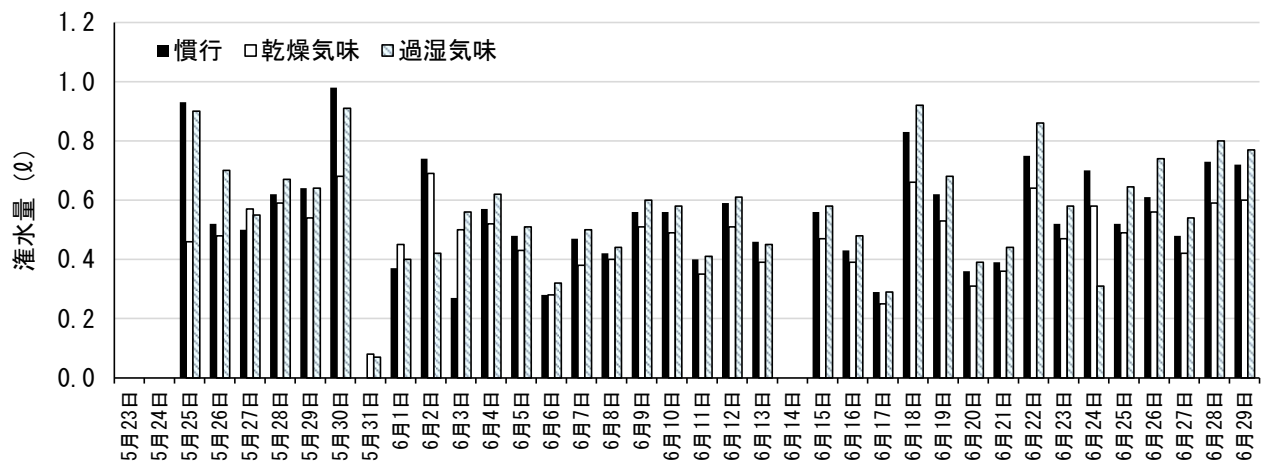


図2 処理期間中の灌水量の推移

注1) n=2

注2) 液肥（トミーブラック 500倍希釈）を施用した日：5月27日、5月30日、6月3日、6月8日、6月13日、
6月17日、6月22日、6月28日

表3 定植時期の苗品質

処理区	葉枚数 (枚)	最大葉長 (cm)	乾物重(g)	
			地上部	地下部
慣行	3.1	12.2	0.118	0.023
乾燥気味	2.9	10.2	0.081	0.021
過湿気味	3.1	12.9	0.135	0.034

注1) 調査日：6月29日

注2) n=10

3 利用上の留意点

(1) 育苗トレイ重は本試験における結果であり、そのまま活用すると結果が異なる可能性がある。本試験の育苗トレイ重は、あくまで管理の目安として活用すること。

4 試験担当者

〔花き研究室 研究員 田邊 雄太
室長 遠藤 英〕